

## 和文要旨

看護教育は、質の高い看護職の育成に向けて、専門学校や短期大学から大学・大学院へと進展し、1990年11校であった看護系大学は、2013年に211校が設置された。しかし、看護系大学の急激な増加は、看護職者の育成に直接関わる看護教員の質的量的不足をもたらしており、看護教育上の重要な課題になっている。

このような看護系大学に所属する看護教員の資格要件は、看護職として3年から5年以上の臨床経験と、大学設置基準によって定められた博士・修士の学位や研究業績等である。看護教員としての教育能力を習得する機会は、各大学のFaculty Development(FD)に委ねられ、FDを進める方向性や支援方法は十分に検討されていない。看護教員は、臨床現場の医療機関から教育機関へと移行し、看護教員としての専門職性を体系的に学習することもなく、乏しい教育経験のなかで看護教育に取り組んでいることが考えられる。

我が国における看護教員に関する先行研究は、新人看護教員を対象としたメンタルヘルスや教育方法の改善、あるいはカリキュラム・教育システムなどが主な内容であった。一方、海外では、臨床看護師から看護教員への移行、看護教員の役割やキャリアなどがあり、National league for Nursing(NLN)やWHOは、看護教員の能力としてコアコンピテンシーを明示していた。海外の先行研究と比較し、我が国では、看護教員を対象とした研究は少なく、看護教員の定義やアイデンティティも十分に議論されていなかった。

教える側の立場を解明するこれまでの視点は、教員の行動や規準、あるいは教員養成の制度であり、教員としてあるべき姿に着目された。しかし、教員であることは、教員が自らの教育実践や学生からのさまざまな反応を通して、教員としての自己を培うことでもある。教員は、直面する現実に向き合いながら、教員であることはどのようなことか、あるいはどのように教員になろうとしていたかを形成していく過程がある。特に、高等教育化時代の看護教員は、先達者がいないなかで、看護教員とはどのような意味があるのか、看護教員とはどのようなことかを問いながら、看護教員としての立場を獲得し形成してきたことが考えられる。

本研究では、次世代看護教員に対する看護教員としての能力や役割の育成を目指して、看護教育の高等教育化時代における看護教員が、看護教員として形成していく過程を探索することを目的とした。

本研究では、看護教員としての形成過程を解明していくために、ライフストーリーを研究方法として採用した。ライフストーリーは、学校教育に関わる教師の立場からその現状や課題を解明していくために活用されている。山田(2007)は、教育の市場化に伴う今日の教師の職務内容や職場環境の実態を明らかにするために、ライフヒストリーを採用していた。その結果、教師の声に耳を傾けるライフストーリーは、教育改革のなかをたくましく乗り切る教師の姿を描いた。

ライフストーリーは、人生、生活等について語った当事者の語りを指すが、語りの記述に留まるものではない。ライフストーリーの語り手と聴き手を、共に能動的な立場に位置づけながら、現在から過去の出来事を遡り、語り手の立場からその意味を探求していく。本研究で解明しようとする形成過程は、「一般の人々が専門職へと移行する過程で起こるアイデンティティや自己理解における変化」(Benner/早野訳, 2011)であり、ライフストーリーによる過去への遡及と探求は、看護教員であることの変化とその意味の解明に繋がると考えられた。

看護教育の高等教育化時代における看護教員としての形成過程を明らかにするために、本論文を5章から構成した。

第1章 看護教育の変遷と現状では、看護教育の史的変遷を辿った。その結果、看護教育は、看護の技術や知識を学生に訓練すれば看護婦資格が取得できる教育を目指していたこと、職業教育から普通教育への移行が停滞していたこと、また、今日の看護教育の高等教育化は、医療技術の進歩と高齢少子化社会による人材育成であり、看護教育側からの要求ではなかったことを明らかにした。今日では、高度な実践能力を備えた人材育成の必要性が高まり、看護系大学・大学院化は急激に進展するようになった。しかし、看護職人材育成に直接かかわる看護教員の量的・質的不足が出現し、看護教育の課題になっていることを指摘した。

第2章 看護教員の現状と課題では、看護系大学の増加を踏まえ、看護教育に関わってきた看護教員を歴史的に取り上げた。その結果、看護教育は、海外から招聘した外国看護教員や医師による教育であったことを明らかにした。このため、看護教員としての立場を確立したり、看護教員として学んだりする機会はなかった。看護系大学が増加するなかで、看護学の学問的体系は確立しておらず、看護学生への指導は困難を極めていた。また、看護系大学に所属していた看護教員に関する調査や先行研究を概観し、看護教育は看護師養

成を目指した看護教育制度が中心であり、看護教員の育成に着目してなかったことを明示した。さらに、看護教員に関する国内外の先行研究では、我が国では看護教員に焦点を当てた調査や研究は不十分であり、看護教員を育成したり支援したりするプログラムなどの不足を指摘した。

第3章では、本研究で採用するライフストーリーとインタビューを取り上げた。ライフストーリーは質的研究の一つであるため、その特徴と方法（グランデッドセオリーや現象学など）について概観し、ライフストーリーの先行研究や具体的な方法について整理した。ライフストーリーは、教師研究で採用され、これまで耳を傾けることがなかった教師の現実接近できる方法であると判断された。また、ライフストーリーは、研究対象者を主体的立場に位置づけ、インタビューによって研究対象者の変化過程を見出せることから、本研究目的に適していることを確認した。

第4章では、看護教員のライフストーリーについて記載した。看護教育の高等教育化時代に教授職としての経験がある看護教員21名を対象にインタビューを行い、ライフストーリーに基づきながら分析した。インタビュー内容を、看護職から看護教員への過程として経時的に辿り、1)看護職への職業選択、2)臨床経験、3)臨床から教育への移行、4)看護教員になること(看護教員としての経緯)、の4つに大別した。1)看護職への職業選択では、(1)看護職を目指す、(2)教員職を目指す、(3)成り行きに任せる、という3つの理由に分類された。2)臨床経験では、“看護・看護職者としての姿を学ぶ”、“仕事・看護に専念し拡大する”、“臨床の経験を通して教訓を得る”というテーマが見出された。研究参加者は、職場環境のなかで看護を学びながら、看護実践への自信や価値を身に付けていたことを明らかにした。3)臨床から教育への移行では、14名の研究参加者は看護専門学校(三年課程)から臨床経験を経て短期大学・大学にて教職を得たが、6名は高等教育機関である短大・大学へと直接進学した。研究参加者10名は、同じ大学に留まることなく、大学設置に向けて別の大学へと移動していた。移動は、看護系大学の看護教員不足による理由が考えられた。4)看護教員になることでは、全体的なライフストーリーとして、“看護に関わる人材の育成を目指して大学教員として研鑽していく”、“組織に関わる課題に取り組みながら適応していく”、“看護・看護学を拠り所にしながら伝えていく”、という3つのテーマが見いだされた。これらのテーマから、研究参加者が、臨床の場から新たな高等教育機関へ移行し、看護職者の人材育成に向けて、看護学を探求しながら、大学教員

としての看護教員の立場を形成しようとしていることが考えられた。さらに、職業選択に相違がある3名を取り上げ、個別的なライフストーリーとして検討した。職業選択に相違はあったが、看護教員としての職業継続の過程には、看護職としての臨床経験や教育活動が累積され、その後の職業継続に影響していたことが考えられた。また、所属する職場環境も大きく影響し、大学教員であり看護教員としての立場を変化させていたことを考察した。

以上を踏まえ、第5章全体的考察では、看護系大学が少ない当時の時代背景から、看護教員が大学教員として学位取得や研究の遂行を図る困難さを指摘した。看護研究の先行研究では、看護教員としての能力や資質の尺度や規準が検討されているが、本研究結果のテーマとサブテーマから、看護教員が主体的に看護職の人材育成や看護・看護学の発展に取り組もうとしていたことが見出された。特に、“看護・看護学を拠り所にしながら伝えていく”は、看護教員の臨床経験を備える意義が確認され、看護教員の専門職性に関わるテーマとして考察した。また、看護教員としての形成過程には、新人看護教員である時期、臨床経験を見直す時期、職場環境から学ぶ時期、があり、それらは看護教員としての職業アイデンティティに影響することを検討した。これらの結果を踏まえ、次世代看護教員の育成支援に向けて、1) 看護教員の臨床経験をリフレクションとして活用すること、2) 新人看護教員に対する指導看護教員を配置することについて提案した。